

19 若年胆管細胞癌の1例

池田 晴夫・和栗 暢生・五十嵐健太郎
 岩本 靖彦・渡辺 和彦・米山 靖
 相場 恒男・古川 浩一・月岡 恵
 橋立 英樹*・渋谷 宏行*
 畑 耕治郎**・坪野 俊広***
 石原 法子****

新潟市民病院消化器科
 同 病理科*
 はたクリニック**
 済生会新潟第2病院外科***
 同 病理検査科****

症例は33歳、女性。

【既往歴】平成12年～下垂体性無月経にてホルモン療法(エストロゲン・プロゲステロン療法)を施行されていた。アルコール歴はなし。

【現病歴】平成16年7月 上記ホルモン療法のため近医婦人科通院中に肝障害を指摘され、はたクリニックを紹介受診。腹部エコー・CTにて肝S4/S5/S6/S7/S8にわたる肝腫瘍を認め当科紹介受診。8月30日精査・加療のため入院。

腫瘍はdynamic CTにて特徴的であったのは①早期濃染する部位と、造影遅延が見られ造影効果が遷延する部位が混在するが、基本的にはhypervascularな腫瘍。②腫瘍中心部の石灰化、③腫瘍内に位置する門脈本幹・左枝の開存、④肝動脈が腫瘍内を貫通、⑤左葉外側区の著明な肥大⇒slow growing、⑥末梢胆管の拡張を認めない、といった点が挙げられた。MRIではT1強調像で低信号、T2強調像、SPIO造影にて高信号を呈した。腹部血管造影検査では肝右葉全体にtumor stainを認め、腫瘍内を肝動脈が既存の走行のまま貫通しており、偏移やencasementは認めなかった。前記した画像所見から末梢型胆管細胞癌、Fibrolamellar HCCを第一に考えた。肝生検を施行した結果Class V腺癌であった。

平成16年9月29日 3区域切除術を予定し手術を施行。術中P3起始部で狭窄がありS2のみを温存する超拡大手術へ変更した。術当日は経過良好であったが、術後第一病日 門脈捻転と思われる循環不全より急変し永眠された。切除標本の病理結果は胆管細胞癌であった。若年者の胆管細胞

癌はまれであると考えられ報告する。

20 細胆管細胞癌の1剖検例

村山 敬之・斉藤 優子・小林 由夏
 横田 隆司・杉谷 想一

立川総合病院消化器内科

症例は81歳、男性。

【主訴】腹部のしこり。

【病歴】平成13年6月13日腹部のしこりを主訴に当科を受診した。腹部エコーにて肝左葉に約10cmの腫瘍を認めた。腫瘍は単純CTにて低吸収域を呈し、造影CTにて辺縁に早期濃染像を認めた。血管造影にて腫瘍は中心部から放射状に伸びる腫瘍血管を有し、淡い早期濃染を示した。SPIO-MRIにて腫瘍内に鉄の取り込みを認めず、肝細胞成分は否定され、胆管系の悪性腫瘍が疑われた。患者は治療を望まなかったため経過観察したところ、平成16年4月20日腫瘍死した。組織病理では肝細胞成分を認めず、未分化の腫瘍であり、胆管上皮マーカーが陽性であることから、細胆管細胞癌と診断した。

【結語】肝細胞癌と異なる腫瘍濃染像を認めた場合、細胆管細胞癌を鑑別する必要があると考えた。

21 胆管内発育型胆管細胞癌の1切除例

玄田 拓哉・齋藤 悠・夏井 正明
 齋藤 崇・姉崎 一弥・塚田 芳久
 関根 輝夫・小山俊太郎*・田中 典生*
 武田 信夫*・下田 聡*

県立新発田病院内科
 同 外科*

22 肝腫瘍で発見された膵内分泌腫瘍の1例

碓井 健文・吉野 友康・藪崎 裕
 瀧井 康公・佐藤 信昭・梨本 篤
 佐野 宗明・田中 乙雄・土屋 嘉昭
 太田 玉紀*

県立がんセンター新潟病院外科
 同 病理部*

症例は72歳の女性。体重減少を主訴に近医受